

子どもの危険回避能力の習得に関する研究

高橋 貴子 [北海道大学医療技術短期大学部/助手]

背景・目的

子どもが健やかな生活を送る上で、様々な危険を回避していくための安全教育の確立が急がれている。死亡には至らなくとも、「事故」によって子どもの成長発達が妨げられる危険性が指摘されている。子どもが自ら事故に遭わないように危険から回避する能力を高めること、あるいはたとえ事故にあってもけがに結びつかない能力を養うことが重要であると考えられる。そこで、体感的な生活体験量と安全態度の関係について着目し、本研究では、危険回避能力—安全態度—と生活体験にはどのような関係があるかを検討することを目的とする。

内容・方法

生まれ育っている地域で子どもは危険回避能力についても育まれていくべきであると思うが、今回の研究では、その居住地域を離れた環境下での生活体験において、子どもの安全態度の変化について調査を行う。子どもがどのような体験を経ると安全態度が改善するかについて検討するために、長期(3週間)にわたり様々な生活体験が農山村地で獲得できるプログラム(以下「長期村」とする)に参加する子どもを対象に、生活体験のターム毎(初期・終了期)の思いを聞き取り調査を行う。また、長期村終了後、半年後の思いを質問紙による調査を実施した。このような縦断的な調査は、これまでになされていなかったことから、こどもの長期にわたる自然体験プログラムの持つ危険回避能力を高める可能性について概観することが可能になると考えられる。

得られた結果データを質的検討を主とした内容分析を行う。生活体験により安全態度を含む何が得られているのか(変化していくのか)について明らかにする。

結果・成果

1) 調査協力者の属性

承諾の得られた調査協力者は、長期村に参加した子ども18名(男16名、女2名)、学年は、小学3年生から中学3年生であった。居住地は都市部11名、町村部7名であった。過去の長期村参加経験は有4名、無14名、日常生活でクラブ、スポーツ少年団、習い事などの何らかの活動をしている子どもは16名であったが、その内、忙しいと感じる子どもは8名であった。将来の夢・自己像を持っていると回答した子どもは13名であった。

2) 生活体験調査の結果

高橋が2002年に作成した生活体験調査を用いて、長期村開始前、開始後、長期村終了後半年後に調査をおこなった。生活体験調査には、第1因子「家事手伝い体験」、第2因子「外遊び体験」第3因子「事故ヒヤリ体験」第4因子「赤ちゃん・病人の世話体験」第5因子「感情表出体験」第6因子「自然とのふれあい体験」第7因子「対人問題解決体験」の7つの因子がある。質問項目は、その体験をどのくらいしたことがあるかについて「1度もない」から「数え切れないくらいある」の5段階で回答を問うものになっている。

協力者の生活体験は因子ごとの平均得点を比較すると、第7因子が高く第4因子の低い子どもが7名、第1因子が高く第5因子が低い子どもが3名、第2因子が高く第4因子が低い

子どもが3名、第2因子が高く第5因子の低い子どもが2名、第7因子が高く第5因子の低い子どもが2名、第7因子が高く第6因子が低い子どもが1名であった。

3) 子どもの長期村での体験がその後の生活にどのように影響しているのか

長期村直後(8月下旬実施:調査A)および長期村終了後半年後(2月実施:調査B)に、長期村で印象に残っていること、安全に関することについて自記式質問紙による郵送による調査をおこなった。長期村直後では18名の、半年後の調査では11名の回答を得た。半年後の調査では、保護者からも同様の質問を行い回答を得た。

(1) 子どもの印象

印象に残っていることを「人」「遊び・時間」という枠組みで尋ねた。半年間という時間経過に伴い、「遊び・時間」は海遊びなどのプログラムとしての遊びを回答した子どもは増えている。「カヌーが沈没しそうになったとき」「熊の糞を見たとき」「自転車で転んだとき」などの、そのことから事故につながるような体験をしたときと回答した子どもが半年後も同様の回答を行っている。プログラムの中には、スタッフは冒険的要素を残しつつ安全に対する配慮を十分に行っている。子どもたちはその中で、自分の希望するプログラムを選択して参加したり、プログラムを提案することもできるようになっている。そのような環境の中で、子どもたちは様々なプログラムを印象深く体験していると考えられる。また、その安全への配慮が高まりすぎると、子ども自身が「これは危険なのか否か」を判断する体験が減少してしまうと考えられる。

(2) 保護者の印象

長期村に参加したことで、「外でよく遊ぶようになった」「手伝いを良くするようになった」「自分のことは自分でするようになった」「生活のリズムが変化した」「見通しをもつようになった」など、子どもが変化したと感じる保護者は半数いた。一方で「変化したいがお稽古などで時間がとれないのかもしれない」「相変わらずゲームばかりしている」と感じる保護者もいた。危険回避する力については「自然界の危険について興味を持ち、大人に聞いたり自らも調べるようになった」子どもが1名いたが、その他は変化がなかった。しかし、危険を回避する力については、「自身を守るのは自身の責任」「いろいろな体験をして自分で気づいて欲しい」「スタッフの危険な出来事・体験談を子どもに多く聞かせて欲しい」「遊びや体験したことの中から自然に身に付けさせればよかった」「けがに対して寛大であるべき」といった考えを持っており、こどもの成長発達の過程の長いスパンで身に付けていって欲しいと考え、今回の長期村での体験は子ども自身が危険回避を考えるきっかけとなり、また、スタッフが子どもにとってモデルとなることが視座された。

今後の展望

長期村という非日常的生活空間が、危険回避能力の習得への有効な場であることが視座されたが、今回の対象者が比較的生活体験因子の高い子どもだったため一般化するには不十分である。そのため調査対象者を生活体験因子が相対的に低い子どもの場合の危険回避能力を習得のプロセスを明らかにする必要があると考える。

昨今、子どもが犯罪の被害者になることも多く、また、北海道という寒冷地での子どもの成長発達を考える上でも、危険を回避する力を高めるためのプログラム構築が早急に取り組むべき課題と思われる。